

挨拶



早稲田大学 産業経営研究所所長 商学学術院教授 花井 俊 介

ご紹介にあずかりました花井でございます。産業経営研究所、主催者側を代表して一言ご挨拶を申し上げたいと思います。

まず大変お忙しい中、時間をやりくりしてくださり、快く講師、討論者をお引き受けいただいた先生方に対して深く感謝したいと思います。本当にありがとうございます。それからこのトピックに関心を持っていただいて、このようにたくさん集まっていたいただいた会場の皆様にも、足をお運びいただいたことに対して深く感謝したいと思います。本当にありがとうございます。

きょうのテーマは、先ほど大塚常任理事のお話にもありましたけれども、とてもわくわくする話になるだろうと思っています。本当に時宜にかなったテーマの設定です。さらに、テーマだけではなく、講師あるいは討論者の先生方の顔ぶれを見ると、これはどうしても期待せざるを得ない内容になるだろうと思っています。きょうはどんなに刺激的なお話が聞けるのか、非常にわくわくしているというのが今の気持ちです。

このところグローバル化が急速に進んでいるというのはよく聞く話で、それに伴って企業の組織も大きく変わっている。特に企業の海外の事業組織と国内の事業組織との差がだんだんなくなってきた、同質化が進んでいるという話も聞きます。この同質化のときにキーワードとなるのが、キー・ランゲージになっている英語であるというのは申すまでもないところだと思います。

こういった話はマスコミを通じてよく耳にするし、テレビなどで見たりもするわけですが、ただ、私だけかもしれませんが現実の世界として一体どうなのかというのは、はっきり言うと想像ができません。一体どんな世界が新しい組織の中で広がっているのか。もちろん大きなメリットがあるからこそ同質化が進むのだろうと思っています。だけれど、同時にいいことだけではなくて、やはり恐らくいろいろな問題点もあるのではないかと思います。素人考えでいいますと、例えば日本人同士が英語で十分に意思疎通できるのだろうか、あるいは組織として重要な情報がきちんと共有できているのだろうか、そういった問題をどのように克服しているのか、あるいは克服しようとしているのか、その辺のところも想像しているだけで私にはわからない問題が山ほどありますので、きょうは具体的なお話を現実に担当されている方々から聞けるということで、非常に楽しみにしています。

きょうの話は、われわれ大学に勤めている者にとっても非常に重要だと思っています。というのは、そういう新しい企業、組織の動きに対して、それに見合うような学生を送り出していかなければいけない、それが大学の立場だからです。したがって、きょうもお話があると思いますが、企

業がどのような英語力を必要としているのか、英語力以外、語学力以外に新しい組織に必要な人材の条件はないのか、そのようなことまで含めて、どこまでお話しいただけるのか、いろいろ言うてはいけないこともあるのかもしれませんが、これからの大学教育を考えていく上でも重要な示唆が得られるのではないかと大きく期待しています。

この魅力的なテーマを設定して、こういった豪華な顔ぶれの講師、討論者の方々を集めて、このフォーラムの実現にご尽力いただいたのは、実はコーディネータの神保尚武先生と森田彰先生です。両先生にはこの場をかりて厚く御礼を申し上げたいと思います。ありがとうございました。

それから、私は今ここで主催者側を代表してお話をしていますが、実は私はこの企画にほとんど携わっていません。私が所長になったのはつい最近でして、もうそのときにはこの企画の準備はほとんどできている状態でした。本当はこの企画を進めたのは私の前の所長、副所長が中心です。ちょっと内部の話で申し訳ありませんが、きょうお見えだと思いますので、前所長の武井寿先生、それから副所長の川村義則先生のご尽力に対して改めてここで感謝したいと思います。ありがとうございました。